

<検討結果>

1. 原子力発電は、人間による科学的真理の発見とそれを応用した技術開発によって生み出された発電方法である。これについて注意しなければならないことは、聖書の創世記 11 章のバベルの塔の箇所から教えられるように、人間が自らの知恵と力を誇り、有限なる存在であることを忘れて神の領域まで侵入してしまっているのではないかということである。信仰者である私たちが原子力発電を検討するときには、この点がどうであるかの検討を十分に必要がある。
2. 原子力発電を肯定する意見としては、世界人口の増加と生活レベルの向上による電気使用量の増大、またそれに伴う化石燃料使用による二酸化炭素の増加といった諸問題に対して原子力発電は解決をもたらすとの主張があった。しかし、今回起こった福島第一原子力発電所事故による被害の甚大さ、およびウラン燃料の採掘と精製に伴う環境汚染と健康被害、さらに 10 万年の期間を視野に入れて安全に保管しなければならない放射性廃棄物処理問題を考えると、もはやそれらは原子力発電を用い続ける理由とは成り得ないこと、また原子力発電はこれから生まれる人間に対して大きな代償を与える発電方法であることが明らかとなった。
3. さらに、今回の原子力発電所事故がもたらした影響は人間だけに留まらず、広く自然界とそこに生きる被造物全体に及んでいる。原子力発電は、自然世界の構成元素ともいえる原子に人工的に中性子を衝突させて原子核を不安定にし、その原子核が核分裂する際に出る莫大なエネルギーを手に入れる技術であったが、同時に、いまだかつて経験したことのない悲慘が放射能汚染によって被造物全体にもたらされた。聖書はレビ記 25～26 章で、「7 年目には全き安息を土地に与えねばならない」と、人間が被造物に対して行う収奪に対する警告を発しており、また、人間に打ち捨てられた土地が「あなたたちがかつて住んでいたところには得られなかった安息を得る」と表現される程に、人間の貪欲が被造物にもたらす被害の甚大なことを語っている。
4. 原子力発電の開発のために国家、企業が丸ごとになって取り組み、多くの人間の知恵と財貨が投入された結果、わずか数十年の間に実用化に至ったことには驚きを感じさせられる。しかし、創世記 11 章のバベルの塔の箇所には、人々が一致団結して天まで届く塔の建設に取り組んだ姿が記されており、人間が誤った方向で一致団結し、集団となって犯す罪についても考えるべきことを教えている。私たちは、天まで届く塔の建設を中止させるため介入された神の行為に、これ以上工事を続けたときに起こる悲慘から人間を回避させて下さろうとした神の恵みを読み取るべきであろう。このことは原子力発電についても当てはめて考えるべきであり、特に他の原子力発電所稼働国とは全く異なる地震多発地帯である日本においては、今後も原子

力発電所を稼働させようとすることに對して、私たちはこれ以上沈黙を続けるべきではない。

5. パウロは地上の権力者フェリクスに、「正義や節制や来たるべき裁き」（使徒言行録 24 章 25 節）について話して聞かせた。原子力発電所事故が起こした問題によって知らされたことは、21 世紀の世界に生きる信仰者はこれまでの歴史の中で生きて来た信仰者以上に、終わりの日に主の前に立つことを知る者として、今生きる者のことだけでなく将来生まれて来る者のことも考えた上での正義と節制に取り組んで行かなければならないということである。このことから、私たちは今、現在の生活の維持やさらなる快適さを求めるのではなく、むしろ本当に必要なものだけを求めて生きることの喜びを覚えられるような福音を聖書から聞き取り、伝えていくべき時代の中に立たされていると言えよう。